

《インタビュー記録》

歴史教育体験を聞く

宮原武夫先生

日 時：2019年9月1日
場 所：千葉県千葉市稲毛区
聞き手：茨木智志・大木匡尚

はじめに

「歴史教育体験を聞く」の目的は、歴史教育に携わってきた先生がたの歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、さまざまな経験や思いをインタビューの形で聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることにある。

今回のインタビューは、宮原武夫（みやはら たけお）先生がお引き受け下さった。宮原先生は1933年1月東京のお生まれで、後に千葉県船橋に移られ、1958年から高校に勤めて主に日本史を担当した。民間教育団体を通じて歴史教育の検討を進める一方で、日本古代史研究や教科書執筆、郷土史研究などにも携わってきた。1987年に大学に籍を移して教育・研究を進め、それは1998年の定年退職後も継続している。

以下は、宮原先生のインタビューの記録である。

1. 生い立ち

— 本日は、よろしくお願いいたします。ご用意いただいた「年譜¹」を拝見しますと、1933年1月2日、東京市江戸川区小岩町のお生まれとあります。

そうです。西小岩小学校²に入学しました。5年生のときに、千葉の船橋に引っ越しをしました。3学期は電車で小岩に通って、それで6年生になるときに船橋国民学校³に転

¹ 「宮原武夫 年譜・論文・著書 2019年8月14日作成」（「年譜」については、以下同じ）。

² 西小岩尋常小学校：現在の江戸川区立西小岩小学校（東京都江戸川区西小岩）。

³ 船橋国民学校初等科：現在の船橋市立船橋小学校（千葉県船橋市本町）。

校しました（1944 年）。

— 船橋に移転されたのは、どうしてですか。

私は戦争が激しくなったので引っ越したとばかり思っていました。大人になってから、父に話を聞いたら、そうではありませんでした。

うちは、愛知・静岡の産地から瓦を取り寄せて工事を請け負う宮原瓦店でした。小岩では、東京に働きに出る人が安い住宅を求めている、セメント瓦の2階建てアパートがたくさんできていました。父はこれに目をつけて、もともとの千葉から小岩に引っ越してきていました。父によれば、小岩での商売の先行きに見切りをつけて、船橋でいい土地が見つかって越したとのことでした。それを聞いて私は、商売人としての父を見直しました。

— 太平洋戦争が始まったとき（1941 年 12 月 8 日）は、覚えていますか。

朝のラジオのニュースは覚えています。学校に行く前、普通とは違う雰囲気戦争が始まったと感じました。

— 1941 年度に小学校から国民学校になっていますが、名前が変わっただけでしょうか。

3 年生の私の印象はそうですね。

— 船橋のほうが戦争の影響が強かったようにお書きになっていたかと思います。

それは担任の先生の性格もあるかなと。小岩では割とおとなしい先生でしたが、船橋の6年担任の先生はあだ名が「ゴリラ」で背が高く体ががっちりした体育が熱心な先生でした。雨天体操場で空中転回をやらされたりしました。明治天皇御製を毎朝クラスで読むというのをやっていました。小岩にいるときには、明治天皇御製なんて全然聞いたこともありませんでした。節をつけて歌ったりして、そういう意味では軍国主義が強いかなと思います。

ただ、西小岩小でも校庭にいつのまにか鉄筋コンクリート製の奉安殿⁴ができていまし

⁴ 奉安殿：学校に下賜された天皇の写真（「御真影」）や「教育勅語」を納めた耐火性の小さな建築物。

た。土の校庭がアスファルト舗装されてその一角にできました。正門のわきにあるので、正門を入るとまず奉安殿に最敬礼してから教室に行くのです。それくらいですね。小岩のほうが暢気な気がしました。

— お書きになっていましたが、5・6年生のときに、『初等科国史⁵』を使われて、軍国少年であったと。

教科書に書いてあることはそのまま素直に受け止めていたというか、一番たびたび出てくるのが元寇、蒙古襲来ですよね。日本は「神の国」だから神風が吹いて蒙古の船は沈んだんだと、アメリカが攻めてきたって神風が吹くからアメリカの船は海に沈むんだと。これを素直に信じて、歴史というのはそういうものだと思っ取っていました。歴史でも、音楽（唱歌）、修身、国語でも元寇が出てきて繰り返し教わるし、素直に信じました。でも、蒙古の船は木製で、アメリカの船は鉄製だという違いには気づきませんでした（笑）。

— 元寇が一番印象的でしたか。

そうですね。それに、説得力がありました。

2. 千葉県立船橋中学校と戦争

— 1945年4月に千葉県立船橋中学校（旧制）⁶に入学されています。船橋国民学校からは何人くらいが進学したのでしょうか。

数名ですね。6年生は男子組2つと女子組でしたが、中学校に行く生徒が少なかった。1割いたか、いないか。1クラスが40～50人だとすると、4～5人でしょうか。

— 受験は難しかったのでしょうか。

いや、受験が形を成していないというか、試験日の1～2週間前に、特別授業だという

⁵ 国民学校初等科国民科国史用に発行された国定教科書。1943年度の5年生では初版の『初等科国史上』（文部省、1943年3月原本発行）を使用し、1944年度の6年生では修正版の『初等科国史 下』（文部省、1944年3月原本発行）を使用したと推測される。

⁶ 千葉県立船橋中学校：現在の千葉県立船橋高等学校（船橋市東船橋）。

ことで日曜日に受験生が学校に呼び出されて試験問題の練習をしました。そうしたら、それがほぼ入試に出ました。受験体制が崩れて、あらかじめ試験問題が伝わっていたのだと思います。試験中に空襲警報が出て、ちょっと試験が中断するという時代でした。

— 戦争中の船橋中学校は、どのような感じでしたでしょうか。

1 学年 4 クラスでした。1 クラスは 40～50 人だったと思います。最初、英語は単語を覚えさせられたのは覚えています。修身は校長先生が 1 時間お説教するような授業があったような気がします。このときは、歴史はなかったと思います。それから、教練の時間があって、木銃というのでしょうか、あれを持って駆けて行つて的を突き刺すとか、高い塀をよじ登るとか、そんなのですね。

— 勤労働員には行かれましたか。

8 月に戦争が終わる前に、勤労働員の経験があります。1～2 か月は学校に通っていました⁷。動員はその後です。一つ上の学年は年度当初から動員に行っていたと思います。私は、家から数百メートルのところにあった千葉工作所へ行きました。

船の先端に爆薬を積んでアメリカの上陸用舟艇に体当たりするという木製のモーターボートである海軍の震洋を作っていたと聞いていました。最近になって船橋高校の同窓会の新聞に 1～2 級上の人の投稿があって、海軍は間違いで、震洋とほぼ同じ構造の陸軍の木造船を作っていたと書かれていました。何かの略記号だと思いますが、カタカナで「マルレ」と呼ばれるものを作っていたようです。長い間、私は誤解していました。

— 空襲は経験されていますか。

直接はないですね。ただ、家に防空壕は作りました。私が住んでいたのは、明治から塩田だったところで、そこを埋め立てた土地でした。30～40 センチ掘ると水が湧き出してくる場所ですから、地下の防空壕は作れません。だから、半地下式に厚い板を組んで壁と屋根を作って、その上に 10 センチくらい土を載せました。堅穴住居みたいで、焼夷弾なんかまともに当たったら突き抜けてしまいます。でも防空壕を作らないといけなから。

⁷ 「決戦教育措置要綱」（1945 年 3 月 18 日、閣議決定）により 1945 年度の学校での授業は、国民学校初等科を除いて、原則として停止された。

家から 2 キロ離れたところに爆弾が落ちて、その場を見に行った記憶はあります。3 月 9 日（1945 年）の夜に東京の方が真っ赤になったのは見ました⁸。10 日の朝には東京で焼け出された人が大勢ぞろぞろ、行列みたいにして、うちは国道に沿っていましたから、千葉の方に歩いていく、顔なんか煤だらけの人が大勢通って行ったというのは見たことがあります。両国の安田学園⁹という中学校に通っていた兄が勤労働員で下町の工場に行っていて、空襲の様子がひどいということを聞きました。

— 船橋では、疎開はありませんでしたか

ありませんでしたが、私は夏休みに疎開したことはありました。船橋の家はそのまま市原郡¹⁰に両親が疎開しました。親戚の畑を父と耕すために学割の証明書で切符を買って行き、私だけが残って親戚のうちに寝泊りすることにしましたが、一晩で逃げ出しました（笑）。夜になるとノミが凄いんです。焼酎を布団に吹きかけて、ノミが酔っばらるところがったのを一升瓶に入れて、ふたをするんです。それが耐えられなくて学割は残り 1 枚しかないのに切符買って一人で帰ってきてしまいました。

— お兄さんが出征されたと伺いました。

兄弟は男が 6 人いて、私は五男です。長兄と次兄が志願して海軍に行きました。父が海軍の軍艦に乗っていた関係がありました。長兄は、明治大学の予科に通っていて、土浦の飛行士を訓練する学校に入ったのですが、結核になって入院して、内地の海軍の基地のある藤枝に配属されて敗戦になりました。同期の人たちはずいぶん戦争で死んでいると思いますが、あまり死んだ戦友の話はしなかったですね。次兄は、中学を出て海軍の学校に志願して、訓練後に旅順¹¹に行きました。戦争が終わって 1 週間くらいで次兄が玄関をドンドンと叩いて「帰ってきたぞ」と夜中に来ました。旅順にいる人がそんなに早く帰って来られるはずがないと、当時は強盗が流行っていましたから、なかなか開けなかったんですよ。次兄は敗戦の 1 週間前に突然、横須賀に配置換えになっていたそうです。二人が兵隊に行きましたが、二人とも無事に帰ってきました。

⁸ 1945 年 3 月 10 日未明の米軍の空襲により東京の下町を中心に死者 10 万人以上といわれる甚大な被害を受けた。3 月 10 日の大空襲と呼ばれる。

⁹ 安田学園：現在の安田学園中学校・高等学校（東京都墨田区横綱）。

¹⁰ 市原郡：現在の千葉県市原市など。

¹¹ 旅順：現在の中華人民共和国遼寧省大連市旅順口区。当時は関東州として日本の租借地であった。

3. 敗戦と学校

— 8月15日(1945年)の「玉音放送」のときは、どちらにいましたか。

ちょうどお盆で親戚が自宅に来ていて、大人4～5人とでラジオを聞きました。私もそこに座っていました。意味は全く分かりませんでした。要するに戦争が終わったということだと教えてもらいました。

— 敗戦後に、教科書の墨塗りはされましたか。

墨塗りはしました。記憶にあるのは、英語の教科書です¹²。単語を覚えるために、絵があって、戦車や飛行機、旗とか、その下に単語が書いてありました。戦車や飛行機の絵と単語には墨を塗り、旗は墨を塗らない。戦争に関係ある武器の類は、先生の指示で鉛筆でバツをして、帰って家で墨を塗りました。英語だけでなく、全科目やったと思います。1年生ながらもタンク(戦車)に墨塗って軍国主義じゃなくなる、そんなバカなことではないと思ったりしました。

— 戦争中の歴史教科書は東洋史・西洋史を内容とする『中等歴史一¹³』がありました。また、1945年12月末に修身・日本歴史・地理の授業停止が指令されましたが、覚えていますでしょうか。

旧制のときに歴史を習った記憶はないですね。修身などの停止は、本で読んでの知識としてはありますが、当時の記憶はありません。1年生の敗戦後も、2年生・3年生のときも授業の細かい記憶はないですね。

— 戦後になって学校は変わりましたか。

学校の雰囲気は変わりました。クラブ活動というのができて、私は、テニスか、バレ

¹² 『英語1中学校用』(中等学校教科書株式会社著作兼発行、1944年1月20日発行、1944年4月8日検定)であると推測される。「Tank」は絵入で何か所かで登場する。

¹³ 戦時中の中等学校国民科歴史用に発行された国定教科書(1944年5月初版と同年10月修正版が存在した)。1944年7月発行の教科書目録(文部省『昭和二十年度使用中学校教科用図書目録』)では、1945年度の中学校1年生は『中等歴史一』の使用が指示されていた。

ーボールか、卓球かで考えて、一番安上がりなバレーボールにしました。中学2年か3年のときです。

ー 宮原先生は、1945年度に旧制中学校に入学して、1946年度に2年生、1947年度の新制中学校発足時に3年に進級して、1948年度には発足した新制高校1年生になった学年になります。高校の社会科は1年次「社会（一般社会）」、2・3年次は選択科目であった時期ですが。

戦争中の軍国主義・暴力教師の稲田という先生が高校1年の「一般社会」を担当しました。だけど、途中で日本史を教え始めました。教えきれなくて放り出して、勝手に日本史にしたのだと思います。それで、私は後に日本史を専攻しますが、高校では「日本史」は選択しませんでした。「一般社会」が実態として日本史でしたので。2年は「世界史」、3年は「人文地理」でした。

ー 「世界史」の授業はどのようなものでしたか。

高等師範出の若い先生が担当でした。笑ってしまうのですが、何も教えないんです。教科書があったかどうか覚えていません。4月に、テーマを決めて、調べて発表しろと、個人であったかグループであったか、生徒に割り振ります。そうすると、図書室に行って参考書を調べて発表する。だけど、図書室には大類伸の西洋史の本が1冊あるだけでした。だから、それを写してきて読み上げるだけで、ちっとも面白くありませんでした。先生はひなたぼっこで、窓際で居眠りしていました。「世界史」で、何を発表したのかも全然覚えていません。試験もあったと思いますが、これも全然覚えていません。

ー 生徒による発表は、多かったのですか。

流行だったのでしょうか、1年のときの「一般社会」の日本史でも発表させられました。私には、鎌倉時代の守護地頭が割り振られました。みんなと違うことをしようと思ひまして、発表した後、「質問ありませんか」と聞き、挙手があって質問があり、すぐに答えると芸がないので、「誰か分かる人いますか」と再度質問して、誰もいないのを見て「では、説明します」と二つやりました。質問したのは、今でも覚えています、浅野と横田で、これは八百長なんです（笑）。あらかじめ「俺の発表の後に、こういう質問をしてくれ」と頼んでおきました。そうでもしないとあまりにも退屈なので、こういういたずらをしました。分からない生徒が話すのですから、読むだけになりますし、全然面

白くありませんでした。

それとは別に、1 年の終わりごろであったと思いますが、学年で二人、私と梶原に課題が与えられました。それは「応仁の乱に近世の曙光が見えるとはどういうことか」という課題に答えろというものでした。第一、問題の意味が分からない（笑）。発表会があったと友達は言っていますが、私にはその記憶がありません。ただ、この課題だけはしっかり覚えています。課題が出た理由は分かりません。「人文地理」は、かなり先生が一生懸命にしゃべっていましたね。

— 新制高校になって、女子生徒は入学しましたか。

私の次の学年からでした。一つ下の学年は 5～6 クラスあって 2 クラスに女子が入りました。2 級下からは男女同数くらいの募集になりました。女子が入ってきたら学校の中はどうなるのだろうか、最初は怖かったです（笑）。

— 「年譜」には、1950 年に税務署員が MP¹⁴を連れて自宅に差し押さえに来たことが書かれています。

部活が終わって夜に帰って聞いた話でした。税務署員が MP を連れてきて「税金を払わないので差し押さえる」と、結婚して間もない兄嫁のたんすにまで赤紙を貼られたそうです。時期的にも、シャウブ勧告によるものと私は理解しました。

— 持っていかれたのですか。

いや、脅かしだったようです。赤紙も間もなくとれたのだと思うのですが、兄たちは真面目に一生懸命に働いているのに、支払えない程の税金を取るなんて、世の中は間違っていると感じました。

— 朝鮮戦争が始まって（1950 年 6 月）の時期ですが。

県のバレー大会の会場で、当時はバレーボールは屋外競技で 10 面もコートがありましたが、その広い中で、どこからともなく話が伝わってくるんですね。「朝鮮で戦争が始まった」と。あってはならないことが起こってしまったと思いました。

¹⁴ MP：米軍の憲兵隊（Military Police）。

4. 千葉商科大学への入学と退学

- 高校卒業後に、千葉商科大学（千葉県市川市）に入学されたということですが、なぜ商学部に進まれたのですか。

高校3年のときに1年生の女の子が好きになってしまって、大学に入るなんてことは眼中に無くなってしまいました。気がついたら行くところがない（笑）。どうしようかというときに、国語の先生で東北の師範学校の教授だった自由主義の先生がいました。授業でも1時間勝手なことをしゃべっていて、生徒は面白がって話を聞いていました。その人が千葉商大の教授を兼任していたので相談に行ったら、千葉商大を紹介されて試験を受けて入りました。家の商売は兄がやっていますから、いずれ勤め人になるには商学部は手頃かと思いました。村田簿記学校の夜間部にも水道橋まで通いました。

- 「年譜」には、独学で資本論を読み始めるとも書かれています。

千葉商大の授業の中でマル経（マルクス経済学）の先生が二人ほどいました。考え方というか、歴史の見方というか面白いと思いました。それで勉強してみようかと。その前に、歴史はなぜ変わるのか、世の中はなぜ変わるのかという大きな疑問を持っていたから、その答えを見つけるのに役に立つかと思いました。河上肇¹⁵の『資本論入門』に書かれている範囲です。第1巻です。

- 「年譜」では、1953年に、「平和憲法を守る帰郷運動」に参加し「船橋青年懇談会」を創って社会科学の学習会を行なったことと、千葉商科大学の学生自治会結成に参加して退学処分を受けたことがあります。まず、帰郷運動というのはどのようなものですか。

東京の大学で夏休みにそれぞれの郷里に帰ったら平和のための活動をやろうという運動がありました。高校のときの同級生や先輩が船橋で何かやろうと、社会科学の学習会を始めました。その流れで平和運動もやることになりました。

¹⁵ 河上肇：1879～1946年、経済学。『資本論入門』は、カール・マルクス『資本論』第1巻を解説した書。

— 帰郷運動と千葉商大の学生自治会の話は別ですか。

全く関係ありません。それに、学生自治会は、私は張本人でなくて1級下に社会科学研究会というサークルができて、そのサークルが中心になって学生自治会をつくろうとなったものでした。そこに、なぜか私が誘われて、「それはいいことだから。手伝っていいよ」と、結成大会の司会者になって、友人が議長になりました。大学から見ると張本人と見られたのかもしれませんが。司会の私と議長の友人とその1級下の社研の学生の3人が退学になりました。

— 学生自治会の結成というのは、退学になるのですか。

退学は自治会でではなく、授業料滞納です。私は危ないと思って授業料を払いに行きました。そうしたら会計が受け取りを拒否したんです。それで授業料滞納という名目で退学になりました。ひどい話です。

全学ストライキとかやりましたが、組織がないから続きませんでした。社会科学研究会はストライキが始まる頃にはもうガタガタになって、組織として機能しなくなっていました。全学ストライキを支えていたのは、私が属していたバレーボール部でした。たしか、大学3年生の6月でした。

そういう大学でしたから未練はありませんでしたが、退学処分はあまり心地よいものではありませんでした。新聞も千葉版や全国版で我々学生に同情的に報道してくれました。当時の千葉商大の理事長がかなり時代遅れであったのではないかと思います。

5. 東京都立大学人文学部への入学

— その後に受験をして、翌年4月に東京都立大学¹⁶人文学部に入学されたとのことですが、この間の経緯をお聞かせ下さい。歴史を勉強したいので、人文学部を選んだということでしょうか。

そうですね。このときは、半年で3年分の勉強をしました。受験教科は5教科で、社会は「世界史」と「日本史」で受けました。最初は、教育大¹⁷を受けようと思っていまし

¹⁶ 東京都立大学：当時は東京都目黒区に本部を置いた公立大学で、2005～2020年は首都大学東京と称した（東京都八王子市等）。

¹⁷ 東京教育大学：東京都文京区に本部を置いた国立大学。現在の筑波大学（茨城県つくば市等）。

た。歴史をやるのだから教師ということもありましたし。ちょうど帰郷運動で来ていた都立大の中国文学専攻の学生から、「都立大は、進歩的な先生がそろっている良い大学」だと聞きました。教育大は英語の比重が高かったし、都立大のほうが有利かなとも思いました。これ以上、親のすねはかじれないという立場でしたので、とにかく落ちるわけにはいきませんから、夏休みに都立大に志望を変更しました。それが功を奏したかは分かりませんが（笑）。

— 周囲の皆さんは受からないだろうと言っていたともお書きになっていますが。

船橋での夜の学習会で、当時出た『社会科学基礎講座¹⁸』や『賃金、価格、利潤¹⁹』などのテキスト講読をやっていて、歌声サークルもありました。それに出ながら、昼は受験勉強をしていましたから。

— 1954 年 21 歳のときに都立大学に入学して、「学生自治会の執行委員長に選出」と「バレー部に所属」とのことですが、執行委員長というのは何か事情があったのでしょうか。

それは共産党の六全共²⁰のあとで、事情は分かりませんが、上の学年の人たちが突然にいなくなったという感じで、仕方なく引き受けてしまいました。それから、自治会活動に深入りせずに歴史を勉強しようと思いました。バレーボールは続けたいと考えました。中学 2～3 年から始めて、教員になっても顧問をしたりしていました。

— 日本古代史を専攻することは、はじめから、そのように考えていたのでしょうか。

人文学部に史学科があって、指導教官を選ぶ段階で、日本史とか西洋史とかの専攻が決まります。私は、かなり早い段階で日本の古代史と決めていました。近世史ですと一生を一つの村の研究で終わるのではないかなんて、バカなことを思っていました。それよりも国家や社会全体を視野に置きたいと考え、江戸時代より奈良時代のほうがという勝手な思い込みで、自分は古代史をやりたいと宣言していました。

¹⁸ 宮川実・柳田謙十郎編『社会科学基礎講座』青木書店、全 10 巻、1953～1955 年。

¹⁹ マルクス（長洲一二訳）『賃金、価格、利潤』大月書店、1953 年、など。

²⁰ 六全共：日本共産党第 6 回全国協議会。1955 年 7 月、日本共産党が武装闘争路線を放棄したことで知られる。

— 都立大学の史学科には^{そうそう}錚々たる研究者がそろっていたと思いますが、史学科の同級生は何人くらいいたのでしょうか。

学生は5～6人です。ギリシア史の太田^{ひでみち}秀通²¹先生、朝鮮史の旗田^{たかし}巍²²先生、モンゴル史の村上^{まさつぐ}正二²³先生がいて、太田先生には学生はほとんどいませんでした。たしか、太田ゼミに入った一人は学習院の教授になりましたが。モンゴル史もあまり人気がありませんでした。日本史は、古代が田名網^{なみあみ}宏²⁴先生、中世が森克己^{かつみ}²⁵先生、近世が北島正元²⁶先生、近代が石塚裕道先生でした。

— 古代史の田名網先生のところには、学生が何人いたのでしょうか。

私だけでした。私は、日本古代史を田名網先生のところで勉強して、理論的な部分を太田先生のところで勉強しました。

大学院に入ってからですが、古代ギリシア史の太田先生がテキストを「魏志倭人伝」にしてくれて読みました。太田先生の頭の中では、戦後に紹介されたマルクスのフォルメン (Formen) ですか、「諸形態²⁷」のことがあったのかなと思います。太田先生は「フォルメンについて書いた論文が、大塚久雄²⁸先生にほめられた」と、駅から大学に歩いているときに学生の私なんか喜んで話していました。太田先生はすごい先生だと思っていましたが、大塚先生という人はもっとすごい先生なのだなと聞いていました。

教師になってから、太田先生にはもう一度救われました。勉強する時間も取れなくて研究をやめようと思ったことがありました。でも、やめる前に太田先生の『史学概論²⁹』という、「人間の科学としての歴史学」という副題のついている本を読み直したんです。そうしたら、これはやっぱり歴史の研究を続けなくては行けないと、やる気が出てきて、また始めた。そういう意味で、太田先生には学生のときだけでなく、教師になってからも救われました。

²¹ 太田秀通：1918～2000年、ギリシア史。

²² 旗田巍：1908～1994年、朝鮮史。

²³ 村上正二：1913～1999年、モンゴル史。

²⁴ 田名網宏：1909～1999年、日本古代史。

²⁵ 森克己：1903～1981年、日本中世史。

²⁶ 北島正元：1912～1983年、日本近世史。

²⁷ 諸形態：資本主義的生産に先行する諸形態（マルクス「経済学批判要綱」）。

²⁸ 大塚久雄：1907～1996年、経済史。

²⁹ 太田秀通『史学概論—人間の科学としての歴史学—』学生社、1965年。

太田先生の『史学概論』は、学生の質問に答えるために書いたものでした。都立大といふところは、学生がしょっちゅう研究室に入ってきて研究室を我が物のように使っていて、学生と先生が対話していたんです。そういう雰囲気の中で受けた学生からの質問を、太田先生は真剣に受けとめて、それに体系的に答えようと思いました。何のために歴史学という学問があるのか、人間として生きていく上で歴史学はどういう役割を果たすのか、ということを学生に分かるように書いてくれました。それで、私は研究をやめないうで済みました。太田先生と田名網先生が、私の古代史の恩師ということになります。

— 卒業論文は^{すいこ}出挙を取り上げたとのことで、田名網先生から勧められたとお書きになっています³⁰。

古代の農民のことを勉強したいと言いましたら、「出挙という制度があるけども、勉強してみないか」と言われました。田名網先生が卒業論文でやったテーマなんです。それで卒業論文も見せてくれました。何かよく分からないけれども、農民のことを扱っているのは確かだということを選びました。

田名網先生は非常に温厚な先生でした。東大の史学科で平泉澄³¹の時代だけでも平泉一派ではなく、その逆の歴研派というのでしょうか。歴史学研究会というのは右翼の平泉一派に反旗を翻す若手の人たちが集まって作ったもので、田名網先生は積極的な歴研の委員とかではないけれども歴研の運動には好意を寄せていました。たしか歴研にその後、実証主義の論文を書いていると思います。むしろ、旺文社の受験参考書で有名になって³²、NHKの高校日本史講座もやっていました。受験参考書では知っていたけれども古代史の先生とは知りませんでした（笑）。

— 出挙を取り上げたとなると、卒論は難しい内容だったのかと思いますが。

それは簡単なものです。出挙というのは、要するに国営の高利貸し事業です。国司や郡司が農民に稲を貸して秋に5割とか3割の利息を付けて取り上げる。それで地方財政が回転していく。それがないと春になって農民は^{たねもみ}種籾がないという状況で、農業が続かない。農業を毎年繰り返していくことと国の高利貸付とがうまく組み合わさって動いて

³⁰ 宮原武夫「古代の農民像を求めて—私の卒業論文「公出挙稲賦課規準についての一考察」—」歴史教育研究所編『歴史学への旅立ち』下、三省堂、1981年（初出は『歴史教育研究』第65号、1980年）。

³¹ 平泉澄：1895～1984年、日本史専攻。

³² 田名網宏は、旺文社の日本史の『傾向と対策』を40年にわたって担当し、『要約日本史』、『日本史の総合整理』、『新日本史の研究』などの参考書を執筆していた。

いる。奈良時代は、当時は稲は束^{たば}で数えましたが、1人あたり5束とか10束とかいう単位で貸し付けていた。それが平安時代になると1反^{たん}あたり何束と、貸し付けの基準が人の数から田畑の面積に変わりました。このことに目を付けました。それはちょうど「軍国主義の時代から民主主義の時代に世の中が変わる。なぜ世の中は変わるのか」は、この人別から反別に変わる原因が分かれば、世の中が変わる仕組みが分かるのでは、というような発想で、そのテーマに私は食いついたと思います。

— このテーマは、その後もずっと今に至るまで、変わりはないということでしょうか。

そうですね。ですから、論文の問題意識は非常にはっきりしていました。

6. 習志野高等学校への就職と大学院進学

— 習志野高校に就職と同時に大学院に進学されていますが、どういった経緯があったのでしょうか。

1958年4月に習志野市立習志野高校の非常勤講師となって、山口久太^{ひきた}³³校長の勧めで都立大学の大学院の聴講生となりました。

山口先生は、私が船橋高校の生徒のときの校長でした。私はバレーボール部のキャプテンをしていましたが、当時は困ったときは校長に直訴するんですね。「ボールが使い物にならなくて何とかしてくれ」とか、「コーチがいないので何とかしてくれ」とか。そうすると、「よし、よし」といろいろ面倒を見てくれました。箱根の駅伝とかで随分鍛えた先生らしくて、千葉県知事選挙にも立候補した、すごい政治家タイプの体育教師でした。

私は千葉県の教員採用試験を受けましたが、山口先生が言うには、「おまえは1000人くらい受けた中で一番だ」と、本当かウソか知らないけれども(笑)、「だまっけていても、市川から千葉の間の高校に就職できるから安心していろ」と言われて、房総半島を電車で一回りして見聞を広めようと思っていたら、まったく学校からの引き合いが来ないんですね。それで、山口先生のところに相談に行ったら調べてくれました。

私は履歴書に「千葉商科大学中退」というのを書いたんです。教員の世界はそういうことぐらいは通用する世界だと思って、わざと書いたんですね。そこを抜かしたくなか

³³ 山口久太：1911～1993年、体育。公立学校教員を経て、習志野高校初代校長。後に八千代松陰学園（千葉県八千代市）を創立した。

った。それが引がかかって、「これは危険人物だ」と私を外していた。それを調べてくれて、「俺が保証人になるから、どこか斡旋しろ」ということになって、ようやく2~3の学校から話がありました。それで、山口先生に「どこどこから引き合いがありました、どうしましょうか」と言いましたら、「1年待てば、習志野高校で採用する。だから1年間は講師をしてみないか」と言われました。

PTA雇いで、月給8000円くらいでした。「ただし、1日休みをやるから大学院の聴講でも行かないか」と言われました。そこで、初めて大学院の授業を受けるということを知りました。山口先生が言わなければ、大学院に通うなんてことは考えてもみませんでした。昼間は図書館の事務をやりながら、授業も「日本史」を少し持って、それで1年間勉強してこいということになりました。

私が千葉県の高校教師を志望していると話したとき、中世史の森克己先生（森先生は家永教科書裁判では国側証人でした）が前年度に日本史で合格した人を知っているからと、手紙で出題傾向を調べてくれました。実際に受験してみると、前年と同じ問題が複数出題されていました。日本史で私が解答できなかったのは、当時も今も教科書に書かれていない「板碑」という用語説明だけだったと思います。

山口先生がどういう考えで私に大学院の聴講を勧めてくれたのかは聞いていませんが、このような裏話が影響していたかもしれません。山口先生の勧めがなかったら、私は古代史の研究をしていなかったかもしれません。古代史の研究をしていなかったら、私の歴史教育研究の方法は今とはまったく違っていたと思います。

— 大学院の聴講生になるに当たっては、試験とかはあったのでしょうか。

聴講生は一応、面接試験があったかも知れません。結局、田名網先生のゼミと太田先生のゼミの2つだけです。大学院に入ったときに聴講生のときの単位は認定されていますから正規の聴講生であったと思います。

— 山口久太先生は、宮原先生にとって重要な役割を果たした人物かと存じますが。

そうなんです。1年たって正規に採用するためには、また千葉県の試験を受けなければなりません。山口先生は大物というか、教育委員会に直談判して、「宮原は1年間、俺のところで使ったんで、頭がバカになったから試験を受けてもだめだ。試験を免除しろ」と。それで、私は採用試験を受けないで2年目に正規採用されました。そういうことをやる校長でした。普通は同期に採用された仲間がいますが、私には一人もいません。初

任者研修も、山口校長は「宮原は出さない」と。それで通っちゃいました。私は1回も出たことがありません。ですから、同期生もいないんです。

— 習志野高校は、習志野市立の高校なのですね。

そうです。定時制の教員は県費負担職員で、昼間の教員は市が負担していました。それも山口校長の策略のようでした。ベテランの先生は給料が高いですよね。旧の師範学校の教授を国語の先生で呼んでくるとか、山形大学の英文科の教授を英語の先生に呼んでくるとか、全国からそういう給料の高い人を集めて定時制に籍を置いて、千葉県が高い給料を払う。それで、昼間の授業をやる。若い先生は昼間の籍で授業をやらせると、そういう抜け道を利用して全国から優れた先生を集めたといわれています。

— 宮原先生は習志野高校定時制³⁴の勤務でしたが、異動はなかったのですか。

30年間、同じ学校でした。「動くように」と言われませんでした。研究もやっていたけれど、授業も割と真面目にやっていました。普通、研究をやる先生は授業をおろそかにすると言われるのが多かったらしいんです。校長や教頭から見ると、「研究もやっているみたいだけれど、授業もまじめにやっているみたいだから、置いておいて邪魔にはならない」と。定時制は学校の経営上、10～11人ですからね。私も居心地がよかったのでそのまま居座ってしまいました（笑）。他にも、長い人はいましたね。

— 習志野高校の教諭となって、同時に大学院に入学していますが、それは“あり”だったのですか。

校長先生に定時制勤務なら大学院に通わせてくださいと、頼みました。校長がいいと言えば、だいたいのことは通りました。その後、千葉や東京でいろいろな問題が起こって、教育委員会が兼職は絶対ダメだとか、厳しくなってきましたけれど。私は何の書類も出さずに、大学院に通いました。

— この時期、大学院に通っていたけれど、職場には公式には黙ってというのは聞きますが。

³⁴ 習志野高校の定時制は2014年に閉課程となった。

山口先生は私の高校時代の校長先生ですし、こちらは半分生徒ですし。私は都立大の学生のときに同級生から頼まれて山口先生の長男の家庭教師を1年したこともありました。

— 昼間は勉強していてということ。

このときは、夕方5時が打ち合わせの時間でしたから、それまでは自由。私が定時制をやめるときには違いました。8時間勤務しろと。ただ、大学院には週に1日か2日しか行っていませんでした。聴講生で単位を取っていたのでちょっと楽でした。

7. 大学院と“田名網ゼミ”

— 働きながら研究をして修士論文というのは大変であったと思います。歴史学研究会（歴研）の古代史部会にも参加とあります。

それが刺激になって勉強が続きました。歴研の古代史部会に出ていなかったら、研究は続かなかったと思います。月1回でした。大学院に入って歴研の古代史部会の人から声をかけられました。当時の古代史部会は崩壊寸前というか、石母田正³⁵さんや藤間生大³⁶さんが時々顔を出して何とか形になっていて、佐伯有清³⁷さん、原島礼二さん、土井正興³⁸さんとか、そんなメンバーでかろうじて部会が続いていました。そこに出るようになって、藤間さんや石母田さんと話をする機会ができました。私が生まれて初めて書いた論文を読んだ石母田さんが、「あれはいい論文だから、あの論文の線で研究を続けるように」と言ってくれたのですが、それはどうもうまく続きませんでした（笑）。

— 学部生のときは歴研に参加されていましたか。

当時は敷居が高くて、学部生が出ていく場ではなかったですね。「太田先生が出ているはずだから」と、行ってみましたが、話がチンプンカンプンでした。たしか国学院の学生も顔を出していたように思いますが、えらい先生の集まりだったかと思います。そんなことで、古代史部会がさびれていったのか、それとも六全共とかで研究者の間で

³⁵ 石母田正：1912～1986年、日本史。

³⁶ 藤間生大：1913～2018年、日本史。

³⁷ 佐伯有清：1925～2005年、日本史。

³⁸ 土井正興：1924～1993年、ローマ史。

も色々あったのか、歴研の活動自体がちょっと下火になっていました。それが少しずつ再建されるのが、私の院生の時代だったのではないかと思います。

— 大学院でも古代史は一人でしたか。

ええ。個人教授でしたね。しかも、大学院を修了してからも、勉強は続けたいと都立大大学院の田名綱先生のゼミに毎週行っていました。その後、田名綱先生は自分の家でゼミを開いてくれました。最初は週1で、後に月1となりました。私は、大学近くにあった田名綱先生の家に通って、勉強を続けました。『続日本紀』とか、「尾張国郡司百姓等解文」とか、史料を決めて、1か月間、私が勉強したことを先生の前で報告するわけです。

— 1対1ですか。

そうです。先生がそれに助言してくれます。午前10時ごろから始めて、お昼を挟んで定時制の授業に間に合うようにと。お昼には店屋物を御馳走してくれるんですよ。10年、20年と、よくやっていただいたと感謝しています。

ただ、一人でやったのは数年で、古代史をやる学生も出てきましたし、保立道久さんや戸田芳実³⁹さん、木村茂光さん、関口裕子さん、大町健さんたちが“田名綱ゼミ”に顔を出すようになって、あとは4～5人の研究会になりました。それで、1986年に東京堂から田名綱宏編で論文集を1冊出しました⁴⁰。これが記念出版ということになります。

— 1961年3月に修論を提出された後、論文をたくさん出されています⁴¹。

卒論・修論で勉強したことを形にしたものです。まあ、よく書いていますよね。よくやったと思います。

³⁹ 戸田芳実：1929～1991年、日本史。

⁴⁰ 田名綱宏編『古代国家の支配と構造』東京堂出版、1986年。

⁴¹ 宮原氏は、1961年7月に「古代における二つの田租—大税と郡稲—」（『続日本紀研究』第8巻第7号）と「倉下と出挙—藺田香融氏の「倉下考」について—」（『日本上古史研究』第5巻第7号）、8月に「不動倉の成立について」（『日本上古史研究』第5巻第8号）、12月に「出挙についての一考察—その起原と性格—」（『日本歴史』第162号）、1962年11月に「公廩稲出挙論定の意義」（『史学雑誌』第71巻第11号）を出している。

8. 習志野高校定時制での歴史授業

— 習志野高校定時制について伺います。何クラスあって、社会科はお一人でしたか。

普通科と商業科の2クラスでした。商業科は20人前後、普通科は30人前後で、定員いっぱいにはなっていませんでした。自衛隊が近くにあって、常時4～5人は来ていました。1～4年の8クラスになります。

社会は、一人ないし一人半でした。「半」というのは、「政治・経済」の担当者が商業科と兼ねるとか。一人ではちょっと足りませんでした。私は「倫理・社会」は持ったことがありません。「政治・経済」を持っただのは4年生の担任を続けるためでした。

— 定時制の生徒の雰囲気は、当初から変わりましたか。

当初は、卒業したら公務員になるとか、大学に行くとか、何かの目標を持っている生徒が何割かいました。全部でなくてもクラスで3分の1くらいそういう生徒がいたら、クラスの雰囲気になりますよね。それで保っているというか。そういう生徒がいなくなってきた、雰囲気がまた変わってくるというようなところでしょうかね。

— 授業が大変になったとか、学生運動でご苦労したとかはありましたか。

そうですね。授業が成り立たない、そういう時期もありました。学生運動というのはなかったですね。60年安保⁴²の頃は生徒の中にも組合の役員や組合員がいて自覚を持っている生徒がいたから、教卓の上に新聞が広げてあって「授業よりも安保の話をしてくれ」と、その催促です。そうするとこっちも勉強しないとね。安保と言っても、いきなりしゃべれないし、新聞も読まなくてはいけないし、テレビのニュース解説も一生懸命見なければいけないし、こっちも勉強させられた記憶があります。

それから授業内容について生徒から忠告されたこともありましたが、「先生、ちょっと言い過ぎるんじゃないの」と、職員室で。具体的なことは覚えていませんけど、やっぱり民衆の味方をし過ぎるところでしょうね。あるいは口が滑って何か余分なことをしゃべったか。あまり政治的なことはしゃべらない方だと思うんですけど。

⁴² 60年安保：1960年の新たな日米安全保障条約に反対した運動。激しいデモが連日、国会を取り囲んだことで知られる。

9. 千葉県歴史教育者協議会での活動

- 25 歳から 54 歳までの 30 年間を過ごされた習志野高校定時制が、宮原先生が授業実践を進めていく舞台かと存じます。その中で、千葉県歴史教育者協議会（千葉歴教協）の再建に関わって、1967 年に委員となっています⁴³。

私は学生のころから歴教協というのは聞いていました。都立大出身の加藤文三さんとか、先輩の中には歴教協で活動している人がいると。自分も教師になったら当然、歴教協に入るものだと思っていました。船橋駅のそばのマーケットに小さな民主書店があって、そこで船橋の歴教協のことを聞き、学習会のことを知って訪ねて行きました。むしろ学習会をやりましょうよと声をかけていったというか。

歴教協は 1949 年に東京でできましたが、それに参加した人が 1953 年ごろに歴教協千葉県支部を作って始まりました。でも、研究集会の名簿が教育委員会に漏れて、参加者にだいたい圧力がかったそうです。それから、その頃は勤務評定反対の闘争⁴⁴とか本格的にやるようになった時期で、歴教協の先生たちは組合の役員が多かったから、定例の学習会が続けられなくなった。そんなことで、いつの間にか、途切れてしまっていました。東京で全国大会があるというので、それを機会に 1967 年に千葉県でも歴教協を再建しようということになりました。

- 宮原先生の最初の歴史教育の研究は、1970 年の「土一揆の成果をどう教えるか」になるかと思います⁴⁵。以後は、古代史の研究と歴史教育の研究が交互に並ぶ感じでしょうか⁴⁶。

そうですね。むしろ古代史を勉強する時間がどんどん減って行って、歴史教育のほう

⁴³ 千葉県歴教協の活動に関連して、宮原武夫「地域における民間歴史教育運動の成立と発展—千葉県歴史教育者協議会の歩みと問題解決学習論争—」（『歴史教育史研究』第 11 号、2013 年）などがある。

⁴⁴ 勤務評定反対闘争：1956～59 年頃において行なわれた、昇給と結び付けた教師への勤務評定に対する反対運動。

⁴⁵ 宮原武夫「土一揆の成果をどう教えるか—敗北史観の克服のために—」歴史教育者協議会第 22 回全国大会（長野）、1970 年 8 月。後に、「生徒はなぜ土一揆は敗北したとみるか」（『歴史地理教育』第 171 号、1970 年）、「土一揆の成果をどう教えるか」（同、第 177 号、1971 年）にまとめられている。

⁴⁶ 宮原氏の習志野高校教員の時代の歴史教育に関する著作には、宮原武夫『歴史教育と民衆』（吉川弘文館、1974 年）、宮原武夫『歴史の認識と授業』（岩崎書店、1981 年）がある。

に時間を使うことが増えていったと思いますね。

— 授業をどうするかというのが、宮原先生の前面に出てきたということでしょうか。

一つはやはり授業が難しくなったということ。今までこっちが一方的にしゃべって、講義式の授業でもなんとか持ったのが、通用しなくなった。生徒が聞いてくれない。というのが一番基本になったとも思いますね。

— 宮原先生の歴史教育の論文を読んでいますと、〈歴史学の成果を教えていればいい〉という歴教協の側面をものすごく批判されていると感じます。そのような批判はいつ頃からでしょうか。

実践としては、「平安京遷都」の授業が大きな境目で、1977年あたりです。はじめに実教出版の教科書の指導書に載せました⁴⁷。大きなきっかけだったと思います。これは全くの偶然に出てきた授業でした。卒業生が教育実習に来て明日で終わりというときに、「もう1回授業を見せてほしい」と言ってきました。そんなことを言う学生は今までいませんでしたから、一夜漬けて考えて、翌日に授業しました。そこでは、生徒に「何で平安京に都を移したのか」、それを考える材料を写真や教科書の事実を示して、「自分は思うか」と言わせました。それで授業は終わりましたが、終わらせるのはもったいない、実習生はもういないけど続きをやったんですね。「いろいろな意見が出てきたけれど、どれが一番正しいのか、出てきた5つくらいの仮説をめぐって考えてみよう」と話し合いをさせました。そうしたら、「都が汚くなったから引っ越したんじゃないか」というようなものもありましたが、なかに古墳時代のことを思い出して「天皇は古墳を作って自分たちの権力を示した。同じように平安京という都を作って自分たちの権力が強いことを示そうとしたんじゃないか」という意見が生徒から出てきた、というのが、この授業のポイントなんですよ。要するに、資料に基づいて自分の生活体験を踏まえて自分の実感で仮説を立てる、歴史を考えてみる。これが一番重要なんじゃないかと、終わってから気がついたんですね。その一番いいところを授業にしてくれたのが、加藤公明さんの「加曾利^{かそり}の犬」ですね⁴⁸。「平安京遷都」の授業は、「加曾利の犬」

⁴⁷ 宮原武夫「日本史の授業論―「平安京遷都」を素材に―」（『歴史の認識と授業』岩崎書店、1981年、238～261頁）。初出は「新しい日本史像の自主形成のために」（『高校日本史指導書』実教出版、1980年）。

⁴⁸ 加藤公明「貝塚の犬はなぜ埋葬されたのか考える」『わくわく論争！考える日本史授業』地歴社、1991年（初出は「加曾利の犬と印旛の象―『考える日本史』のために―」『千葉史学』第3号、1983

に引き継がれたと千葉の歴教協の人たちは位置づけたりします。

— それをやるつもりで始めたのではなく、偶然ということでしょうか。

要するに、安井俊夫さんの実践を、どう自分のものにするかということを考えていた時期なんです。安井さんの実践の良さは、生徒の生活体験を踏まえた考え方を素直に出させて、それを授業で発展させていくというものです。問題点はそれが歴史学の成果からずれていくことがあるけれども、それに対する有効な手立てがまだ打ち出されていない。安井さんのいい面を伸ばしながら、歴史学の研究成果と離れてしまうという問題点をどう克服するかということを考えていたときに、たまたま実習生から突然に言われたので、そのときに一番考えていた問題を授業にしたのだと思います。

— このころは、宮原先生が大学で教員養成に関わる前の時期ですが、1971年に小学校低中学年社会科の問題点という論文もあって⁴⁹、小・中・高を念頭に見ておられますよね。それは、どうしてでしょうか。

それなんです。千葉県歴教協を再建して、各地に支部を作りました。先輩たちは、名簿が漏れて個別に弾圧されたという経験があるから、「一つだとつぶされてしまう。千葉県内のあちこちに歴教協を作らなければ駄目だ。郡市単位に支部を作ろう」と呼びかけをしました。千葉歴教協としては、そのとおりだと支部を大事にしました。そして、小学校の先生が歴教協に参加し、授業実践を発表するようになってきました。研究担当だった私は、小学校の先生が歴教協に継続して参加してくれるようになるためにはどうしたらいいか、というのが自分の課題だと思いました。

それで、夏休み全部を使って、私は小学校の実践ばかり1か月間、読んだんです。山下国幸さんとか、山本典人さんとか、奥西一夫さんとか、当時『歴史地理教育』にたくさん書いていた小学校の先生たちが単行本にまとめていました。その本や『歴史地理教育』の論文を読み、そして千葉県歴教協の研究集会で発表された小学校の先生の実践記録を読んだんです。これは、一生懸命に読みました。古代史の論文を読むのと同じ気持ち、同じ態度で読みました。それはどういう読み方かという、どこに意見の食い違いがあるかと、例えば、一人の人の実践報告でも最初に書いた建前と最後に来る結論に矛盾がないとか、取り上げた教材と論旨の展開に何か不都合はないとか、一人の先生

年)。

⁴⁹ 宮原武夫「小学校低・中学年社会科の現状と問題点」『歴史地理教育』第190号、1971年。

の実践記録の中に矛盾がないかを見つける。山下さんの主張の中にどこか矛盾がないか、矛盾を見つければその矛盾を解決するためにはどうしたらよいか。次の手が考えられますよね。そこを指摘する。「あなたの実践は、このように主張しているけれども、結論はこうになって、違っているじゃないですか」と。「どうしたら首尾一貫した実践報告になるのか、考えてください。答えを教えてください」と、問題を提起するわけですよね。それを1年生の実践、2年生、3年生、4年生と読んでいったら、夏休みが終わってしまいました。5年生、6年生は、そのときに読めなくて宿題になりました。

それでも、運動を広げる上で大事なことからすぐに発表しようということで、「小学校低中学年社会科の現状と問題点」として、1971年9月の千葉県歴教協の総会で発表させてもらいました。そうしたら、翌年の1月の研究集会で反響が出てきて、「千葉県の歴教協はいいところだ、自分たちの実践が評価されて問題点が示される」、「ここでレポートすれば勉強になる」という意見が出てきました。思った通りでした。そこで役立ったのが論文の読みかた、古代史の論文を読むのも社会科の実践記録を読むのも、読む姿勢は全く同じ。問題点はどこにあるのかということですかね。

— 同じく高校にお勤めであった1981年には、「小学校社会科の授業論」を松本金寿・柴田義松編『社会科教育の理論と実際⁵⁰』に書かれています。

柴田義松⁵¹さんが松本金寿⁵²さんの記念論文集を編集したときに、社会科教育論の巻を1冊作ったんですね。そのときに白井嘉一⁵³さんが私に小学校社会科授業論を書くようにという課題をくれました。私の「低中学年社会科」の論文を白井さんが読んで評価してくれたのだと思います。「小学校の授業は授業参観以外に見たこともないのに」と思ったのですが、高学年を残していましたし、やってみる価値はあるかと取り組みました。柴田先生とは打合せのときに一度お会いしました。この本は、実質的には白井さんの編集です。お茶の水の喫茶店で打ち合わせたとき、柴田先生は白井さんの企画に賛成してお任せという感じでした。また、これについては後日談もありました。広島大の先生がどこかでこの本の批評を書いてくれました。その中で、「宮原は小学校の社会科の授業論についてこれだけ書けるんだから理論を書けるはずだ。理論を書くべきだ」と書いていましたが、私にはこれ以外、理論も何もありませんでした（笑）。

⁵⁰ 松本金寿・柴田義松編『社会科教育の理論と実際』国土社（教科教育双書）、1981年。

⁵¹ 柴田義松：1930～2018年、教育学・教授学。

⁵² 松本金寿：1904～1984年、教育心理学。

⁵³ 白井嘉一：1945～2013年、社会科教育学。

— 小学校の授業実践を、古代史の史料や論文と同じように読むということでしょうか。

史料も論文も同じです。簡単に言えば矛盾の発見ですよ。なぜ矛盾が生じているのか、どうしたら、その矛盾は解決できるのか、というふうに考えれば、課題を克服できるし、先の見通しが立つではないか、ということです。

10. 千葉大学教育学部

— 1987 年の 54 歳のときに、千葉大学教育学部に移られています。

前任は谷川彰英先生です。千葉大の先生から公募があると誘いがありました。私の 1 年後に、地理の竹内裕一さんが来ました。社会科教育は 2 人で、歴史と地理が基本です。

— まもなく『社会科教育入門⁵⁴』を出版されています。

これは千葉大に行って 1 年目の初等社会科教育法の授業記録です。助教授で入ったもので、「教授のポストが空いているから早く業績を出してくれ」と言われました。講義の準備に追われて論文を書く時間がなかったので、授業をテープにとって業者に頼んでテープ起こしをしてもらって、大月書店で本にしてもらいました。講義ではだいたい同じことを 3 回しゃべっていますね（笑）。その“重複部分”を削って、本にしました。その後の授業ではテキストとして紹介はしました。取り上げる実践も、これと重なる年も、新しいのを入れた年もあったりしました。

— 千葉大学に移られた前後に臼井先生と共編で小学校社会科授業に関わる本を発行されていて⁵⁵、さらに『ファミリー版 世界と日本の歴史』全 12 巻⁵⁶を共編著で出されたのも大学にいらした前後の時期かと思います。この「ファミリー版」という企画の中心になったのは宮原先生と鈴木亮⁵⁷先生になりますか。

⁵⁴ 宮原武夫『社会科教育入門』大月書店、1989 年。

⁵⁵ 臼井嘉一・宮原武夫編著で『たのしくわかる社会科 人物史で学ぶ歴史教育』（上・下、あゆみ出版、1984 年）、『わかる教え方 社会科 3 年』・『わかる教え方 社会科 4 年』・『わかる教え方 社会科 5 年』・『わかる教え方 社会科 6 年』（国土社、1992 年）が発行されている。

⁵⁶ 『ファミリー版 世界と日本の歴史』全 12 巻、大月書店、1987～1988 年。宮原氏は全体の編集委員と第 2 巻（古代 1）・第 3 巻（古代 2）・第 12 巻（現代 4）の共著者となっている。

⁵⁷ 鈴木亮：1924～2000 年、世界史教育・歴史教育。

鈴木亮さんと私が関わっています。とにかく日本と世界を一つにしてというものです。モデル原稿は鈴木さんが書いたり、私が書いたりでした。

— 改めて読んでみて気づきましたが、宮原先生は日本史だけでなく、古代オリエント（第2巻）なども書いていますよね。

ええ、書いています。書く人がいませんでした（笑）。私は太田先生の授業を受けていましたから、古代ギリシアやオリエントに関心を持っていました。

— 中学生が読めるようにというのは、かえって学術論文よりも大変だったのではと思いますが。

そういう面はありますね。難しいです。大月書店の意向もあり、とにかく読んで、絵にならなくては駄目、テレビを見るように画面が浮かんでこなくては駄目だという規準を設けて原稿を検討しました。鈴木さんの第1巻⁵⁸は『朝日新聞』の書評でも紹介されました。際立っていますよね。このときは、大江一道⁵⁹先生も元気でした。

— 日本社会科教育学会（日社学）で編集委員長もされていますが、日社学への参加は千葉大に行かれてからですか。

そうです。それ以前は全くつながりがなかったのですが、白井さんから「日社学に入るべきだ」と勧められました。日社学に新潟大学の高山次嘉先生がいて、会長もしていました。高山先生は教育出版の小学校社会科の編集委員もやっていて、以前に編集会議で顔をあわせたくらいでしたが⁶⁰、私が千葉大学に行ってから話をする機会が増えました。高山先生はいろいろな役を私に経験させようとされたようで、編集委員長（1994～1996年）の他にも、連続講座の特別委員長（1996～1998年）とかも務めました。編集委員長は大変ですね、いろいろな意見がありますから。高山先生が新潟大学を定年退職したときに、わざわざ1升瓶の「越乃寒梅」を送ってくれて、こんなことまでしてくれるのかと申し訳なく思いました。

⁵⁸ 鈴木亮『ファミリー版 世界と日本の歴史』第1巻（原始 文明の誕生）大月書店、1987年。

⁵⁹ 大江一道：1928～2019年、西洋史。

⁶⁰ 宮原氏は1974～1988年に教育出版の『小学社会』の編集執筆を担当していた。

- 1998年3月の定年のときに、学位を取られて同時に、『子どもは歴史をどう学ぶか⁶¹』が発行されています。博士論文とはどういう関係になりますか。

最後の年に授業のコマ数を竹内さんに背負ってもらって、少し楽をさせてもらって博士論文を書きました⁶²。『子どもは歴史をどう学ぶか』は、最初と最後はちょっと変えたかもしれませんが、ほぼ博論と同じです。青木書店編集部の島田さんという船橋の人が、「退職に間に合わせましょう」と言って、頑張ってくれました。

- (茨木) 小・中・高の現職教員の大学院生たちと読んで、大変に盛り上がりました。博士論文としては「博士(史学)」でお出しになったのですね。

そうです。本当は前に書いた古代史の本でもよかったみたいなのですが、どうせなら新しく書いたほうが、自分の記念にもなりますし、こういうときに頑張らないとまとめるエネルギーはたまらないと思いました。

11. 実教出版の高校日本史教科書

- 時間は前後しますが、次に実教出版の『高校日本史』について伺います。宮原武夫・黒羽清隆⁶³編著の『高校日本史』は1980年度から使用され⁶⁴、後にA・Bそれぞれが作成されて2015年度まで全部で11種が発行されました。「実教出版『高校日本史』の編集体験」によると、1974年12月に実教出版から話があって、1978年度用に向けて編集作業が1975年3月から宮原先生と黒羽先生のお二人を中心に始まったとされています。最初の話は宮原先生にあったのですか。また、日本史の場合は高校教師だけでは難しいと宮原先生が主張して、大学の研究者も集めたとのことですが、宮原先生の人選だったのでしょうか。

どちらが先かは分かりませんが、打診があったのは黒羽さんと同時ではないでしょう

⁶¹ 宮原武夫『子どもは歴史をどう学ぶか』青木書店、1998年。

⁶² 宮原武夫「小・中・高校を一貫する歴史学習の研究—歴史研究と歴史学習の関係—」東京都立大学提出博士論文、1998年。

⁶³ 黒羽清隆：1934～1987年、日本史・歴史教育。

⁶⁴ 宮原武夫・黒羽清隆他『高校日本史』実教出版(日史428)、1979年3月31日検定、1980年1月25日第一版発行。

か。実教出版はたぶん同時に何人かの高校教師に声をかけて、意見を聞いたと思います。世界史教科書のほうが早く動いていたと思います⁶⁵。その「編集体験」は2015年に話をする機会があってまとめたものです⁶⁶。

研究者の人たちは、私が推薦した人がほとんどそのままですね⁶⁷。大江志乃夫⁶⁸さんは、黒羽さんが勧めた人だと思います。黒羽さんの話では、大江さんに頼んだら、「じゃあ、交換条件がある。『教科書訴訟を支援する歴史学関係者の会』の事務局長だか編集長だかを引き受けてくれ」と言われて決まったと。冗談だか、本当だかは分かりませんが(笑)。

— 調べましたら、実教出版の日本史教科書は1955年度使用から始まり、その後に複数種発行を基本として現在はA・B合わせて4種発行となっています。その中で、1980年度使用から宮原先生・黒羽先生の『高校日本史』が始まります。『高校日本史』(A・B)は2013年度・2014年度使用から君島和彦・加藤公明編著に受け継がれています。君島先生・加藤先生の『高校日本史』は2013年6月に東京都教育委員会が都立高校での採択を認めない旨の通知を出して問題となりました。宮原先生のときは検定で2回落とされた⁶⁹とのことですが、2回というのはすごいですね。

2回の不合格が逆宣伝で、2回も不合格になるのだから良い教科書だろうと評判を呼んだ面もあったようです(笑)。三省堂の編集の人に言われたことがあったのですが、「前例では2回落とされるとだいたい断念する。実教が3回目に踏み切ったのは、実教内部の特別な事情があるだろう。例えば、社会科に特別に理解のある重役とか社長がいると

⁶⁵ 実教出版の『高校世界史』(吉田悟郎・鈴木亮・大江一道ほか、1978年3月31日検定)は、1974年から編集を開始していた(「歴史教育体験を聞く 二谷貞夫先生」『歴史教育史研究』第16号、2018年、など)。

⁶⁶ 宮原武夫「実教出版「高校日本史」の編集体験 2015. 8.24」。子どもと教科書船橋ネット21主催の船橋「近現代史学習会」(2010年～2019年)において作成・配布されたものである(全10頁)。以下の話はこれをもとにしている。

⁶⁷ 共著者は、久保哲三・佐藤和彦・峰岸純夫・北島万次・青木美智男・大江志乃夫の6名である(宮原武夫・黒羽清隆他・前掲『高校日本史』、奥付)。

⁶⁸ 大江志乃夫：1928～2009年、日本史。

⁶⁹ 前掲「編集体験」によると次の通り。1975年3月5日：第1回編集会議、1976年9月21日：原稿本(白表紙本)を文部省に提出、1977年3月7日：文部省で不合格理由の説明、1977年9月21日：第2次原稿本を文部省に提出、1978年2月28日：文部省で不合格理由の説明、1978年9月11日：第3次原稿本を文部省に提出、1979年3月12日：文部省で条件付き合格の条件指示の説明、1979年3月31日：文部省の検定合格。

か、そういうことでもない」と3度目は出さない」と。

— 実際にそういう人がいたのでしょうか。

いたみたいですね、ここで踏ん張ろうという人が。

— 不合格理由や検定意見の通告のときに、「組合の強い実教や三省堂は録音機を持ちこんだ」とあります。録音テープは聞きましたでしょうか。その資料は残っていますか。また、このときの白表紙本とかはお持ちでしょうか。

白表紙本は、引っ越しのときに全部処分してしまいました。本棚にずらっと並んでいたのですが、2年遅かったですね。録音テープは、直接は聞いていません。そのテープ起こししたものは見っていますが、残ってはいません。

— 同じ実教出版の『高校世界史』の場合は、録音機材は用意してあったようですが、やり取りの中で録音はしなかったと聞きました。

そうですか。私のときは「録音させていただきます。いいですか」、「いいです。では、うちも」と、こっちが取ると文部省も取りました。

— 基本的に、どうして落とされたのでしょうか。何か、にらまれていたのでしょうか。

そうでしょうね。それから、教科書裁判の争点については妥協しないというところなんかは、我々の一つの基本方針でした。この教科書は、家永訴訟を支援するための教科書だという位置づけでした。

— 「編集体験」の中では、歴史のおもしろさとか、生徒の歴史の見方の問題とか、生徒の生活感情をどう刺激するかとか、いろいろと「生徒の」、「生徒の」と書いてあります。これを意識してお書きになったのでしょうか。また、文章はおおむねお二人でお書きになったのでしょうか。

意識して書きました。文章の執筆は分担ですが、研究者の人が書いた原稿を規定の1節3ページに収まるように手直したのは私と黒羽さんでした。分担は、私も古代を、黒羽さんも近代を書きました。その上でリライトは前近代を宮原が、近現代を黒羽さん

がやりました。最初は箱根の宿舎にカンヅメでやりました。

- 高校教師のお二人の名前が、教科書の著作者の最初に記載されているのは、あまりなかったことと思いますが。

実態を表しています。ふつうは高校の教師は編集補助役として後ろに書かれますよね。

- 「編集体験」には、『高校日本史』は多くの学校で使われたと書かれています。なぜそれほどの支持を集めたのでしょうか。

私も「編集体験」をまとめるときに調べて、これほど多く採択されたのかと驚きました。もっと少ないと思っていました。理由は、なぜでしょうね。一つは「歴史のまど」とか、「歴史のひとこま」とか、各節ごとのコラム風の書き方は「ファミリー版」と同じです。具体的で、読むと目で見える、姿・情景が浮かんでくる。そういうところから歴史学習が始まる。徹底するまで30年かかりましたけど、あれが評価されたのかと。「採択できなかったけれども、『歴史のひとこま』はコピーして配って授業のときに使っている」という話は聞きましたね。あとは、教科書裁判の争点をきちっと書いた、あるいは書くように努力した、そういう評価かなと思います。

- 1980年度から2015年度までと相当に長く続いています。

そうなんです。編集・執筆の実務は、1975年から2013年まで38年間です。自分でも驚きました。

- 途中で黒羽先生が亡くなられて（1987年）。

それで、石山久男さんに入ってもらいました。

12. 最近の古代史研究や郷土史研究など

- 2014年に上梓された『古代東国の庸調と農民⁷⁰』は、1973年の『日本古代の国家と

⁷⁰ 宮原武夫『古代東国の庸調と農民』岩田書院、2014年。

農民⁷¹』以来の2冊目の古代史の著作になるかと思います。この間の40年の古代史研究の集大成になるのでしょうか。

千葉大学を定年退職したときに思ったのですが、歴史教育にかなりエネルギーを割いていて、千葉県史の古代史部会長という役割はありましたが、ほとんど古代史はやっていないのに等しかった。だから、定年退職して、自分は古代史の研究者と名乗ってよいのかなと、ふと疑問に思ったんです。それで名乗れるか否か、証明してみないといけな

いと考えました。千葉歴史学会の古代史部会を千葉大学でやっていました。10人前後でしたが、継続するためにも史料講読をやることにしました。そのときに「尾張国郡司百姓等解文」31か条を毎月1か条ずつ分担して読んでいくことになりました。私は、毎月1か月勉強したことを〈サブ報告〉として報告させてほしいともお願いしました。

久しぶりで難しい史料を読んでも、全然読み取れません。漢字が並んでいるだけで、それこそどこに矛盾があるのか、あるいは研究史のうちで、誰の説と誰の説は同じなのか、矛盾なのか、そういうこともよく分からない。とにかく分かっても、分からなくても漢和辞典を引きながら三日でも四日でも漢文と対面する、対決する。もう仕事が無くなって、暇ですから。そうやって粘って見ていると、行間にすきまが空いてくる、行間が見えてくる、そういう中で問題点がこの辺にあるのではないかと見えてきました。

著名な研究者が同じ史料を使って全く別の主張をしているにもかかわらず、誰もそれに気づかずとともに正しい学説として両立してきた。二人の主張は矛盾していて、片方が正しいければ、片方は間違えている。しかも、二人の主張がかなり重要な論点に関わる問題、というようなことに気がつくわけです。それを、最後に2つ論文を書いたんです⁷²。これは『史学雑誌』の「回顧と展望」でも取り上げられて評価されました。それで「私は古代史研究者だ」と名乗ってよいという結論を自分で出しました。退職後の自分の〈身分証明〉のために、勉強して書きました。

— 宮原先生の一番新しい著作は昨年（2018年）の『続 船橋の歴史散歩⁷³』になります。長年にわたって地域史といえますか、郷土史といえますか、千葉県や船橋市などの歴史研究にも関わって来られました。現在は、どのような課題をお持ちですか。

⁷¹ 宮原武夫『日本古代の国家と農民』法政大学出版局、1973年。

⁷² 宮原武夫「尾張国解文の庸調と交易」『日本歴史』第663号、2003年。宮原武夫「尾張国解文の租税と田制」『千葉史学』第43号、2003年。ともに前掲『古代東国の庸調と農民』に収録されている。

⁷³ 宮原武夫編著『続 船橋の歴史散歩』崙書房出版、2018年。2011年には、宮原武夫編著『船橋の歴史散歩』（崙書房出版）が発行されている。

「地域史」と呼んでも、「郷土史」と呼んでも、いろいろと課題は出てきます。この本でも取り上げましたが、船橋では戊辰戦争のときに局地戦がありました。薩長側にも幕府側にも戦死者が出て、薩長側の戦死者には明治 19 年（1886 年）に千葉県が金を出して立派な墓石を建てました。一方、幕府側の戦死者には、「墓に埋めてはいけない。戦死者は野ざらしにしろ」という命令が出ました。ところが、千葉県の中で船橋だけは幕府側の戦死者を、「脱走様」（だっそさま）⁷⁴と敬称をつけて呼んで、戒名をつけて埋葬しているんです。いくつかの墓には、埋葬した人の名前すら書いてあります。ばれたら処罰されるわけですよね。財産を取られるかもしれない。それにもかかわらず、「脱走様」の墓が何か所もあるんです。そういう船橋の庶民の意識はどこから出てくるのか。

「明治 150 年」（2018 年）の政府のキャンペーン⁷⁵があるわけですけど、逆に船橋では行方不明になっていた脱走様の墓石が 2013 年に復元されてもいます。「明治 145 年」を意識したわけではないでしょうが、昔の記録をもとにして、復活するんです⁷⁶。それから脱走様の墓には、お地蔵さんが立っていたり、今も花が絶えずに供養されています。一昨年には、「戊辰戦争の武士の墓」であると書いた新しい碑も建てられています。これをどう考えるか。どう歴史的に意味づけするのかという課題も出てくるんですよ。

— こちらも関わりますか。2017 年の『歴史地理教育』に「地域の史跡の掘りおこしの勧め⁷⁷」を書かれています。

その前段階ですね。史跡見学で「物」を見るのも大事だけれども、見学者はそれでは満足しないのではないかと。その“背後”にある「人の生活」を追求するということです。

— 宮原先生は韓国の歴史教師との交流にも携わってこられました⁷⁸。その中での日韓歴史教育交流の課題もいくつかお書きになっています⁷⁹。これにも関わっているよう

⁷⁴ 江戸開城に反対して江戸から「脱走」した幕臣のこと。

⁷⁵ 明治 150 年：2018 年は明治元年（1868 年）から 150 年ということで、「明治 100 年」（1968 年）にならって政府主導で「明治」の顕彰事業が推進された。

⁷⁶ 海神念仏堂（船橋市海神）。宮原武夫編著・前掲『続 船橋の歴史散歩』、44～58 頁。

⁷⁷ 宮原武夫「地域の史跡の掘りおこしの勧め—物から人へ、文化財から民衆の歴史へ—」『歴史地理教育』第 863 号、2017 年。

⁷⁸ 宮原氏は 2001 年以後、歴史教育者協議会の日韓歴史教育者交流委員会の委員長を務めた。

⁷⁹ 宮原武夫「日韓の歴史認識の違いを越えて—『向かいあう日本と韓国・朝鮮の歴史—前近代編』出版の意義—」『歴史評論』第 684 号、2007 年（歴史教育者協議会・全国歴史教師の会編『向かいあう日本

に感じましたが、いかがでしょうか。

あまり深められていないのですが、せっかく交流したのだから、そこから何か教訓を引き出しておきたいと考えました。「日本と韓国・朝鮮の歴史を書く」です⁸⁰。ただ「交流を続けました」だけでなく、交流の中で何が分かったのか、これから何をしなくてはいけないのか、特に歴史の認識に関わる問題を明らかにしたかったのですが、うまく材料が集まりませんでした。

— 最後に伺います。宮原先生のご経験から見て、教師にとって歴史教育で大切なのはどのようなことであるとお考えですか。

二つ、あります。田中正則さんという小学校の先生が、3年生の「市の人びとのくらし」の学習で、「下水の処理は、市役所の仕事で、みんなきれいになって川に流れるんだよ」と教えたときに、ある子どもが「先生、うんちはどうやって流れるの、どこに行くの」と質問をした。この子は先生の言う通りじゃないと知っているんですよね。「処理場の水は泡がいっぱいチョコレート色だったよ。先生、うそ言ってるんじゃないの」と。この発言を聞いて、クラスの子どもたちが自転車で行って、「全然きれいになっていない。汚いまま川に流れている」、「先生の言ったのはうそだ。教科書に書いてあるのはうそだ」と分かったと。そこで、授業を全部やり直したという実践です⁸¹。私は、この実践に学ばなくてはならないと思います。

この実践を読んだときに、自分が子どものときのことを突然思い出しました。小学校4年のころだと思うのですが、当時、小岩のあたりは汲み取り便所でふたを開けて、ひしゃくで汲み取って持っていきます。ふたが外れていると便壺中の色が見えます。かくれんぼや鬼ごっこで遊んでいる間に「便壺は家によって色が違う。黄色っぽい家もあるし、赤っぽい家もある」と気が付いて、「なぜだろう」と何日も何日も一生懸命考えたんです。それで、あるときにふと気がつきました。「自分の家は男が多い。男ばかりで、便所は黄色っぽい」と。ところが「近所の桃井さんの家は女ばかりで、便所の中が赤

と韓国・朝鮮の歴史—前近代編』〔上・下、青木書店、2006年〕は、韓国語版も同時に発行された)。さらに、「歴史教育交流学」の提案をしている(宮原武夫「日韓歴史教育者交流会 第6回(岡山)シンポジウムの総括の試み」『歴史教育者協議会 日韓交流委員会ニュース』No.51、2008年3月)。

⁸⁰ 宮原武夫「日本と韓国・朝鮮の歴史を書く」剣持久木、小菅信子、リオネル・バビッチ編著『歴史認識共有の地平—独仏共通教科書と日中韓の試み—』明石書店、2009年。

⁸¹ 田中正則「けんこうな生活—下水のしまつを終わって—」千葉県歴教協編集発行『子どもとつくる中学年の社会科』、1977年。宮原武夫・前掲『社会科教育入門』、19～24頁。

い」と。だから男が多いと黄色で、女が多いと赤いのではないかということを〈発見〉して、私は「ああ、よかった」と思って、それっきり何十年も忘れていました。それを田中さんの実践を読んで突然思い出した。敗戦後の中学生のときに「民主主義の時代と軍国主義の時代に違いがある。そんな違いが出てくるのは、なぜだろう」と考えたことも、大学生のときに卒論で「出挙の貸し付けが、奈良時代は人別だったのが平安時代には反別に変わったのは、なぜだろう」と考えたことも、小学生のときのかくれんぼ遊びの間に考えたことが基礎になっている。発想は同じだということが一つ。

— もう一つは、何でしょうか。

もう一つは、子どもの学びの世界には二つあるということです。子どもが生活の中で自然発生的に「変だなあ」と思って考える、子どもの自由勝手な学びの世界と、学校という装置を作って教師がそこに子どもを押し込めて行なう学習の場の二つです。江戸時代の寺子屋の絵は、子どもは先生のほうを見ていないですね。みんな勝手にでんばらばらに好きなほうを見て学びたいことを学ぶ。これが人格の形成とか個性の尊重とかにつながる学習です。それが、明治以降の小学校になるとみんな先生のほうを向いて先生の言うことを覚えようとする。これが学校での学び、一斉授業です。ここでは正しい答えがあって、これを覚えなければいけない。

根本的に、人間の学習の場は、個人の自由な発想の場と学校教育とを区別して、学校の枠にはめ込む教育ではその範囲を限定すること。学校教育は大事だけれど、それには限界があって、学校教育が踏み込んではいけない子どもの自由な学びの世界がある。それを保障するのが民主主義の基本ではないかと。この二つを区別して歴史教育を考えていくとすると、子どもの「変だなあ」という気づき、これを学校教育の学習の基本に据えなくてはならない。学校が教えたいことと区別する。歴史の授業の中でも両面があるということを常に意識することです。

関連して、今の「歴史総合」の議論で、君島さんの意見と井ノ口さんの意見の二つがあります⁸²。井ノ口さんは授業に即して子どもの自分なりの学びというのを大事にしようとしている。それに対して、君島さんは今の小学校の社会科をモデルにすれば高校の「歴史総合」はやっていけると言っている。けれども、そんなに甘いものではないのではないかと。だから、今の教師に「日本史探究」は教えられないのではないですか。君島

⁸² 君島和彦「歴史総合とはどのような科目か」（『歴史地理教育』第880号、2018年6月）、井ノ口貴史「『歴史総合』の批判的な検討から創造的実践へ」（『歴史地理教育』第888号、2018年12月）、君島和彦「歴史総合をどう見るか：井ノ口貴史論考へのコメント」（『歴史地理教育』第898号、2019年8月）などを参照。

さんは社会科の復活だと言ったけれども、そういう問題なのかなと。もっと根本的な問題に立ちかえて、本当の子どもの学習権を保障する教育とは、いったいどういうものか。そこから考えないと、また同じ過ちを繰り返すのではないかなということを最近感じますね。

— 長い時間、お話をお聞かせ下さいまして、本当にありがとうございました。

後記

インタビューのお願いを快くお引き受けいただき、貴重な多くのお話を伺うことができた。古代史・歴史教育・郷土史等の研究や実践を、研究者・教師・市民として一貫して継続されてきたお話は大変に興味深いものであった。ただし、聞き手の勉強不足により表面的なまとめ方しかできていない部分が多い。注記等で紹介した宮原武夫先生の各論考等を参照していただければ幸いである。

最後に多くの資料をご用意いただき原稿完成にも多大なるご協力を賜った宮原武夫先生に心から御礼を申し上げます。

(注記に関して、さまざまな文献やホームページ等の情報を利用させていただきましたことを申し添えます。)

(文責：茨木智志)